

ぶろす

四季の会・ユーザーズ・サービス

324号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 麗春の候、先生におかれましては益々ご健勝のことと存じます。

日経4月17日、総務省が4/16に発表した2012年10月時点の推計人口で、65歳以上の高齢者が初めて、3千万人を超えた。地域別にみると、全都道府県で65歳以上の人口が14歳以下の人口を上回った。このうち25道県では、14歳以下より75歳以上の方が多くなっているのです。

世界も経験したことがない急速な高齢化は、社会保障体制の抜本的な見直しを迫ることになるでしょう。シニアの消費意欲も鈍るし、働き盛り世代の負担に依存する高齢者医療や介護などのあり方が変わるかも知れません。大変な時代になるようです。

税理士の定年は75歳！

税理士新聞4月15日号の「税界春秋」で、税理士関根稔氏がこんな面白いことを書いていました。税理士の定年は75歳だろう、いや85歳かもしれない。なにしろ平均年齢が63歳の業界です。

「歳をとったら毎年の税制改正は辛い」。そのような声を聞くことがあるが、それは杞憂だろう。ある実験の結果では「歳をとると記憶力が悪くなる」と説明してテストすると、高齢者の成績は悪くなるそうです。しかし、そのように告げずにテストを行なうと、若年者と比較して有為な差異は生じない。つまり暗示にかかってしまうのです。

「歳をとると物忘れがひどくなる」。それも思い込みだろう。仮に、小学校1年生なら、彼の頭の中にあるのはクラス30名の級友の名前だけだ。しかし、社会に出れば、頭の中には500人、あるいは1000人を超す人たちの名が保存される。その中から目的の氏名を検索しなければならない。大量の本が収納されている図書館で目的の本を探すのと同様に、大量のデータを保存した頭の中から目的のデータを探し出すのに時間を要するのは当然なのです。

「名前を覚えられなくなったのは歳のせいだ」というが、それも違う。誰でも、昔

から記憶力は悪いのです。これは、中学生の頃、単語カードを作り、何度も繰り返して学習したことを思い出せば納得できると思う。始めから覚える気もなく、名刺を交換しながら、名前が覚えられないと嘆くのは筋違いです。「年齢と共に脳細胞は減少する」という理解は間違いだ。逆に記憶の中枢を占める海馬の細胞は適度な刺激によって増加することが、最近の研究によって明らかになっている。

毎年、改正税法を学習する必要があるのが税理士だが、それ故に、毎年、知識が更新され、専門家の存在価値が陳腐化しない業界でもある。税法の改正は、昨年の税法の上に積み上げられる連続性のある改正だから、今年の改正の理解には、昨年の税法を知っている人たちが格段に有利になる。ただ、一度でも改正税法の学習を怠ってしまえば、その後のフォローは辛くなってしまいうだろう。連続性が欠けてしまえば、改正の前後関係も分からなくなってしまうからです。

昨日の経験と知識を積み上げて、今日の自分が出来上がる。能力は、年齢と共に向上することはあっても、後退することはないのです。毎年の学習の積み重ねが税法の理解を深め、アドバイスの言葉に経験の重みを与える。自分の努力によって、定年年齢を85歳にも、90歳にも延長が可能な職業。それが税理士業なのです。

そこで私は、税理士の「堅い話から笑いをこめたコミュニケーション」が大事のようです。決算を活かす「決算診断提案書」です。税理士の経験の中から価値あるアドバイスで、「物言わぬ会社」でも「数字をもと」に社長に語りかけることができ、お客様（経営者）との「よき関係性」を深く広げていけるものと確信しています。

過去の経験を活かす老人は強い

脳科学者 茂木健一郎氏は、日本を代表するある企業で、創造性についてお話しさせていただいた。質疑応答の時間になって、ある方が発言された。「若いときのほうが、創造的だとよくいわれるが、本当のところはどうなのか？」。

確かに、「世の中を変えるような革新的な発明、発見は、若いときになされることが多い」、というイメージがある。キャリアの早い時期には新しいものを次々と生み出した人が、その後鳴かず飛ばずというケースも多い。一方で、例えば画家のパブロ・ピカソのように、晩年まで創造性を失わなかったケースもあるのです。

年齢と創造性の関係は、どうなっているのか？定年が延長されたり、何歳になっても働く意欲を持つ方が増えた現代の日本において、多くの人に関心を持つテーマだろう。この問題を考えるうえで重要なポイントは、「創造といっても、無から生まれるのではない」ということです。

私たちが体験したり、知識を得たり、スキルを身につけたりしたことは、大脳皮質

の側頭連合野を中心に記憶として蓄えられる。「創造することは、思い出すことに似ている」。何かを想起する際には、側頭連合野の記憶が、そのまま前頭葉に引き出される。一方、「創造するということはすなわち、記憶が編集され、結びつきを変えて活用される」ということです。

一見全く新しいもののようにも、実は、側頭連合野に蓄えられた記憶をもとにしている。ただ、結びつき、組み合わせが変化しているの、不連続であるかのように見えるだけなのです。

さて、「年齢を重ねるといことは、側頭連合野に、それだけたくさんの経験が蓄積される」ということである。従って、その分、創造性のための素材も多くなることになる。「それならば、若いときよりも、むしろ年を重ねた後のほうが、創造のための条件が整っているはずである」。

「ただし、年をとってから創造性を発揮するためには、二つの条件がある」。「一つは、創造する意欲を失わないこと」。創造のためには、側頭連合野の素材が、前頭葉に引き出され、活用されなければならない。そのためには、前頭葉を中心とする、意欲の回路が十分に働かなくてはならない。

「もう一つは、逆説的だが、自分自身の経験にとらわれないこと」。側頭連合野に記憶が蓄積されることは、創造するための素材になってくれると同時に、固定観念にとらわれてしまうリスクともなる。例えば、過去の成功体験にとらわれてしまうと、新しいことへのチャレンジができなくなる。だから、「年をとって、さまざまな経験を重ねることは、創造性のための素材が蓄えられる」、という意味ではいいのだけれども、「同時に、意欲を持ち、自分の経験にとらわれない冒険心を持つ必要がある」のです。

ユーザーズぶろす310号によれば、『アップルの故ジョブズ氏は、こんなことを語っています。「模倣」と聞くと「創造性や独自性」とはほど遠い行為だと思ってしまう人は多いでしょう。けれども、「学ぶ」の語源は「まねぶ」であり、模倣は「創造の母」とも言われます。私は、「模倣」には2つの側面があると思っています。それは、「良い模倣」と「悪い模倣」です。「美しい模倣」と「醜い模倣」があると言ってもいいかもしれません。ジョブズ氏はピカソの言葉を引用して「優れた芸術家をまねる。偉大な芸術家は盗む」とも語っています。この言葉は、模倣から独創性が生み出せることを暗示しています。実際、彼は意外なところからインスピレーションを得ていました。』

茂木氏は、「結論を申し上げます。意欲を持ち続け、自分の過去の経験にとらわれない老人は、最強だということです」。そのように私が回答を締めくくると、「集まった社員の方々から笑いが起こった」。「笑いも創造性の大切な要素である」。ユーモアのセンスを持つものごとを見ることは、心をやわらかくして、固定観念にとらわれないようにしてくれます。(PRESIDENT 2013. 3. 4 茂木健一郎氏より)